とかす力（八木重吉の詩を愛好する会会報）

事務局（連絡先）〒277-0014　千葉県柏市東 3-8-34　柏第一宣教バプテスト教会
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊天利武人（教会牧師）電話 04-7164-9159
（会報編集、ホームページの連絡先）〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継
＊＊＊＊＊＊　Eメール　kmat27aiko@gmail.com　　携帯電話 09061674553

☆　第　２３　号
☆2021 年（令和 3 年）
９月９日　発　行

★ 残念ですが、今年も茶の花忌の催しが中止となりました！

昨年、初めて、茶の花忌の催しを中止せざるを得なかったので、生家の記念館管理者佐藤様と茶の花忌準備委員会は､今年こそはと実施する方向で計画を練っていました｡拡大してしまったコロナ感染の状況を憂えつつも、収束の兆しが見えればと待ち続け、今年は 8 月下旬まで実施か中止かの決定を保留していました。しかし一向に収束の兆しが見えない状況が今も続いており、生家の佐藤様より、100 人近くの人々が集う行事をこの状況では は開催できないとの申し出もあり、準備委員会としても、中止せざるを得ないとの結論に至りました。

八木重吉愛好者の皆様にとっては、1 年に 1 度の大行事に参加する楽しみがあり、緑豊かな自然の中で詩情にふけることが出来る貴重な機会だったので、本当に残念に思われると思いますが、日々のニュース報道を見聞きすれば、如何ともしがたい状況であり、中止の判断はご理解いただけると思います。

前号でもお伝えしましたように､今年 2021 年は 1927 年（昭和 2 年）10 月 26 日の八木重吉の死去以来 94 年、1984 年（昭和 59 年）の八木重吉記念館開館以来 37 年になり、八木重吉没後 100 年も迫って来ています。茶の花忌の歴史の整理もするべき時期に来ています。八木重吉の詩を愛好する会も 1985（昭和 60）年の結成以来 36 年となります。このような時期に 2 年も続けて茶の花忌の催しが中止となる事は、盛り上がりにおいて大きな痛手です。愛好者の皆様とも自由に会って気軽に話し合いが出来ないのは本当に残念です。

しかし今は現状を受け入れて耐えるしかできません。ただ何らかの方法で愛好会としての活動を継続し、生家の活動も助けて行きたいと思います。愛好者の皆様も、このような状況にめげず、八木重吉の詩を読み、また各自の研究を続けてください。また茶の花忌中止の情報をお知り合いの方にお伝え下されば幸いです。

★「ギャラリービブリオ」の十松弘樹さんとギター弾き語り歌手 YO-EN さんの柏訪問

前号で紹介した「ギャラリービブリオ」の十松弘樹さんと YO-EN さんが、8 月に愛好会の事務局がある柏に来られ、訪問記録を書かれていますので、お二人の許可を得て、その一部を会報でも紹介しておきます。

YO-EN　八木重吉（1898-1927）の足跡を辿る小さな旅「柏編」　　十松弘樹

8 月 10 日（火）。東京ツアー中の YO-EN さんは千葉県柏市を訪れた。早世のクリスチャン詩人・八木重吉（1898 - 1927）の足跡を辿る小さな旅だ。僕も随行させていただいた、YO-EN さんは数年前の偶然の出会いからすっかり重吉の詩に心酔、導かれるように詩に曲をつけて歌唱している。発表曲はまだ少ないが実はすでに 10 数曲できている。「ひとりの詩人にこんなに夢中になるのは初めてです」「貪るように曲をつけました」と語る YO-EN さん。もしかしたら、その出会いは「偶然」などではなく「必然」だったのかもしれない。柏市には教師としての重吉最後の赴任校・東葛飾中学校（旧制。現・千葉県立東葛飾高等学校中学校）がある。そして当時は東葛飾郡千代田村と言ったこの地は重吉が最後に妻子とともに暮らした地。当時、不治の病だった肺結核に罹患した重吉はここから茅ヶ崎のサナトリウムに移り、29 歳の短い生涯を終えた。

12 時 30 分に国立を車で出発。中央高速、前日までオリンピック特別割増料金だった首都高、常磐自動車道を通って柏を目指した。柏駅近くのコインパーキングに車を止めて、待ち合わせの時間まで駅近くのスターバックスで時間調整。待ち合わせのお相手は 30 年以上、ここ柏の地で八木重吉の詩の研究・普及活動をしている「八木重吉の詩を愛好する会」渉外担当の小林正継さん。元・英語教師で数年前、重吉の生家の物置から約 100 年ぶりに発見された重吉の学生時代の英語の日記を出版した「八

木重吉英文日記」の翻訳者でもある。かねてより YO-EN さんの八木重吉楽曲を高く評価してくれていて「八木重吉の詩を愛好する会」の会報「とかす力」にその活動を大きく紹介してくれた。また伝説の劇画家・つげ忠男さんとコラボした新 MV「わたしはわるい人間だもの」のテキスト欄に賛辞を寄せてくれている。挨拶のあと、まずは東葛飾高等学校をご案内いただいた。ここは重吉が教鞭をとった学校である。そして敷地内には詩碑「原っぱ」がある(道路側に向けて)。これは昭和 60 年(1985)に結成された前出「八木重吉の詩を愛好する会」が、詩碑建立を呼びかけ建立委員会を組織し東葛飾高校同窓会を中心に募金を働きかけ建立した。小林さんは当時からの中心メンバーの一人で、ご自身、東葛飾高校の出身者なのだ。

←詩碑「原っぱ」

ずいぶん／ひろい原っぱだ／いっぽんのみちを／むしょうに／あるいてゆくと／こころが／うつくしくなって／ひとりごとをいうのが／うれしくなる／　これは重吉が柏市、当時の千代田村在住時『文章倶楽部』という雑誌に投稿した詩で、初出時は「野原」だったが後に詩稿に整理する段階で「原っぱ」と改められたこと、この「原っぱ」は「柏競馬場」を経て現在の広大な「豊四季台団地」になったと小林さんに教えていただいた。同校卒業生である小林さんの案内で校内へ。重吉がいた当時の校舎はさすがに残っていない(小林さんの在校時は現役で使っていたという)が、その建設当時は最先端のモダンな建物だった石造りの玄関アプローチが残され、モニュメントとして往時の姿を今に伝えている。

保存されたモニュメント

そのあとは登美子夫人が著書『琴は静かに』でたびたび言及している「流山みち(流山街道)」を教えていただいた。さらに学校職員住宅あと、仮寓あと、などをご案内いただいた後、車で柏市「東」にある「第一宣教バプテスト教会」に向かった。「八木重吉の詩を愛好する会」は事務局の住所を閑静な住宅街にあるこの教会に置いている。

同会の事務局長の任にある天利武人(あまりたけと)牧師と面談。天利牧師も東葛飾高校の OB。小林さんの先輩にあたる。症例の少ない「B 群溶連菌による劇症型壊死性筋膜炎」という難病で股関節より左脚を離断しての車椅子生活。牧師としての活動をしながら「八木重吉の詩を愛好する会」の活動をしている人。数年前にはキリスト教系ネット TV の CGNTVJapan の長寿番組「本を旅する」で司会の久米小百合さん(元・「異邦人」の久保田早紀さん)をお相手に八木重吉の詩について語っている。教会の集会室でお茶をいただきながら八木重吉と重吉の詩についていろいろたっぷりと語り合う充実のひと時を持つことができた。

[本の旅]442編：重吉と旅する。②

↑YO-EN さんと天利牧師(前)と小林さん(後)

時間がいくらあっても足りないような語らいだったが切り上げて 2 階の礼拝堂を案内していただいた。

ちょうどステンドグラスから陽光が差し込む時間の荘重な空間。

世俗にまみれ切っている僕までしばし敬虔な心持ちになった。復路は外環道。なかなかしぶとい渋滞につかまって往路の二倍の時間をかけて帰ったが、夕日の美しさは格別だった。

八木重吉と私　　**YO-EN**

八木重吉という詩人を知らずにいた私が、偶然手にした八木重吉詩集。重吉の感性に心から共感し、特に気に入った詩には、自ら作曲し歌いたいと自然に思うようになりました。まるでそうすることで、重吉と同じ視線で同じ世界観に浸れるかの如く、貪るように次々と曲をつけていきました。そしてそのあと私に訪れた幸運は、漫画家つげ忠男さんのイラストと楽曲のコラボだったり、今夏の東京ツアー中に起こった感動的な出来事だったりするのです。その感動的な出来事とは、東京ツアー中にありました。

さて上記の記事にあるように、出向いた教会で八木重吉について熱く語り合うという場面で、牧師様に「あなたは詩が好きなのですか？それとも八木重吉が好きなのですか？」と語らいの終盤に問われました。

↑詩碑「原っぱ」の前で、十松さん（右）と私

どういう意味か戸惑い直ぐに答えられず、狼狽えて上手く答えたか疑問ですが、こんな気持ちを伝えることができたと思います。

「私は八木重吉の感性が好きだ」

「研ぎ澄まされた感性で、誰の心にも響く意味深い愛のある言葉を選び抜く能力も」

「ことばの韻や美しいリズムも心地がよいし」

「今までは、絵画を観るように、詩集を手元に置き、それぞれに感慨深くふけってみたが、これほどまでに私の心を掴んで離さない詩というのは、やはり八木重吉がずば抜けている」と。

私の話を聞いた牧師様の目は、先ほどよりも暖かな瞳になった気がしたのですが、帰りの車の中で十松さんが、「ヨーエンさんの気持ちが通じたと思います」と聞いて良かったと一安心しました。

★「八木重吉の詩を愛好する会」の歴史のまとめについて

1985 年（昭和 60 年）の結成以来 36 年が過ぎました。八木重吉の詩が愛されていることは、多くの詩集や研究書、歌や絵などの芸術表現としての作品などの発行がされてきたことで分かります。しかし意図しても簡単には実現しない活動が詩碑建立です。複数の方々の協力が結集されて実現する活動だからです。御影もそうですが柏の場合、八木重吉が教師として教えた学校の同窓会に多大な協力をいただいて資金が集まり、建立が実現しました。愛好会の最初のメンバー4 人のうちの 3 人が東葛飾高校（旧制中学）卒業生であったことも活動意欲を高めました。結成者の 4 人のうちすでに 2 人の方が他界し、愛好会の事務局を務めている 2 人（天利武人牧師と私〈小林正継〉）が中心になって、初期と比べたら活動が大分縮小したものの、ここまで愛好会を運営してきました。詩碑建立だけで終わらせずに全国の愛好者の輪をつなぐという目的で、多種多様な活動をしてきました。

現在、この愛好会の歴史をまとめる作業をしています。とくに、結果的に全国にある詩碑の中で最も大きく重い詩碑は、柏の「原っぱ」です。地域の人々の協力を得るために天利事務局長の多大な尽力がありましたので、

詩碑建立経過についての記録は、概略をもう一度伝えておきたいと思います。また曲がりなりにも 36 年になる活動の概要を記録しておくことで、八木重吉の愛好者たち（現在も今後も）に役立てることがあると思いますので、会報の記録や発行物を参考に、歴史を整理した冊子を発行する予定でいます。期待していてください。

・・

★　あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

（募集）　題：「八木重吉との出会いとその詩の魅力」（この内容に沿うなら別のタイトルでも OK です。）
字数：２０００字程度（原稿用紙５枚程度、パソコンのワード歓迎）
締切：なし（随時お送りください）
送り先：メール（　kmat27aiko@gmail.com へ）か
郵送で　　〒270-1406　千葉県 白井市 中２０５ 小林正継　へ

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス　　http://www.yagijuaiko.com/　　（作成途中の部分があることをご了解下さい）
E メールアドレス　　kmat27aiko@gmail.com　（管理者小林正継）

・・

◆八王子の愛好者、日朝時の尾崎文英さんが亡くなられました！

前号の会報発行の後、便りをいただいた中で、八木重吉の熱心な愛好者で日朝時の住職を務めていた尾崎文英さんが 2 月に亡くなられたことを、ご子息の現在の住職様より頂きました。85 歳だったとのことでした。何回も茶の花忌にも参列され、お話もいただきました。私が文英様よりいただいた本の中に記録されていた文章の一部を紹介し、追悼に代えたいと思います。

・・

私は、八王子にある日朝寺の住職をしています。

毎年十月二十六日は、茶の花忌、八木重吉さんの命日です。私は八木重吉のファンとして、今まで何回も、茶の花忌でお話をさせていただいております。相原大戸は、私たちの大好きな詩人、八木重吉さんのふるさとです。ここに佇んでおりますと、八木重吉さんにお目にかかっているような実感がこみ上げてきます。不思議です。

〇
幸福なひとはどこにをるのか
そのひとこそ
春の草のように生きてゐる
いつも　いつも
ふるさとへかへる田舎道を
さやかなこころであゆみつづける
詩稿「柳もかるく」（大正 13 年 4 月）

ふるさとの川
ふるさとの川よ
ふるさとの川よ
よい音をたててながれてゐるだろう
母上のしろい足をひたすこともあるだろう
『貧しき信徒』（昭和 3 年 2 月）

〇
ふるさとの
山をおもへば
聖者のごとく
ふるさとの
川をおもへば
はつこひのひとみのごとく
ふるさとの
空のたかくに
しづかなる鐘なるがごとし
ふるさとの
かの山の
かの木かげに
かすかなれど
わすれたるものあるここち
詩稿「逝春賦」（大正 13 年 5 月）

相原は、八木重吉さんが生まれ育ったところであり、こころのふるさとなのでした。これらの詩に「ふるさとへ」「ふるさとの」と刻しております。そして今、重吉さん家族は、茶の花かおる八木家のご墓所に安らかに居られます。私たちは、こんなに身近に、重吉さんとの詩と祈りのご縁を頂いて、ここにこうしているのです。

八木重吉さんは、私たちを友として、「愛」を謳ったすばらしい詩をたくさん残してくださいました。重吉さんの「心のしたたり」のような詩は、子どもから成人、老年に至るまで、三世代を超えて、読む者の心に、生命に通ってくるのです。この茶の花咲く清澄な季節のようにです。（尾崎文英）